

# 今年前半の気象とキマダラカメムシ

東京農業大学昆虫学研究室

平井 一男 (ひらい かずお)

今年（2015年）は冬から春にかけて高温少雨で推移した。近くの熊谷の気象データで見ると、前年12～5月までの降水量は平年比65%、月平均気温は平年並みの2月を除き1～5月まで高温で経過し、5月の平均気温は30年間で最高気温を記録した。この温暖少雨傾向と連動しているのか、春以降、愛好家から蝶の発生は早目で量も多いとのニュースが寄せられた。直接見た例では庭のジャコウアゲハは例年より早く4月下旬から産卵し、2回目成虫も6月上旬の出現と早かった。5月のエノキではヒオドシチョウが観察中の15年で初めて多発し、中旬には一斉に蛹化した。野菜園では未成熟インゲンマメへのカメムシの加害が多かった。

東アジアの南方でも冬～春に高温少雨で推移した。5月下旬にハノイ近郊の収穫間際の水田を視察したが、猛暑で蒸し暑かった。トビイロウンカは少発生、見回ったところでは坪枯れは見られなかった。現地識者の見解では高温すぎて発育に不適とのこと、一部早々に北方移動した群があったようで、西日本では近年まれな早期捕獲が報じられた。

夏の高温で発生量が抑えられた例は2013年長江流域のトビイロウンカの発生と被害が抑制されたことを現地の専門家から聞いた。日本はそれに比べ高温の質が違ふと思われ、その年は例年のない夏の高温少雨で早期飛来群の増殖が逆に助長され多発年になった。

筆者は2011年7月に東京都小金井市内のハナミズキにいたキマダラカメムシ *Erthesia fullo* を初捕獲した。街路樹ハナミズキ（樹高約3m）の下方の小枝の葉裏に大きめのカメムシが止まっていた。普通見かけるクサギカメムシなどではないことは直ぐにわかった。一回り大

きく、上面（前胸背、前翅と小盾板）は紫黒色、そして明らかな黄斑「キマダラ」がある。20余年前の春、上海植物園のウメの古木で観察したキマダラカメムシに酷似していた。それ以降このカメムシの発生量、年次変動や農作物の害虫化に関心を寄せている。

文献によるとキマダラカメムシは1170年長崎で最初に発見されたという。その後九州、西日本では広域に発生し、植物ではナンキンハゼやサクラ、ケヤキに多いという。近年は東日本でも観察されている。例えば早くは2008年小平市で、2010年9月三鷹市野川公園、2011年7月葛飾、小金井市、同年9月相模原市、さらに2014年9月埼玉の一部などで発生が報告されている。しかしその発生は広域的というよりスポット的な発生にみえる。

関東で2008年以降発生している原因については確かなことはわからないが、成虫は飛翔性に富むことを考えると、成虫自ら発生地を拡大したか、あるいは周年発生地から未発生地に何らかの要因で移入されたとしても、越冬態の成虫にとって関東の寒冬年は多少生存しにくかったとしてもそれ以外の暖冬年に恵まれ個体数を確保できたと思える。

熊谷の気象で具体的にみると、最寒月1月の気温では2007年1月の平均気温はカメムシ類を含む多くの昆虫類が多発した2000年に次いで極端に高温に推移した。2008年は2月がやや低温であったが、それ以降2010年まで暖冬が続いた。その後は寒冬で推移し、2015年は1～5月までは平年を上回った。このような越冬期の高温推移はキマダラカメムシの個体数存続にプラスに作用したと思える。

一見似ているクサギカメムシは果樹から豆類、野菜等広範な植物に寄生し害虫として認識されているが、キマダラカメムシは主要害虫として聞いたことがない。しかし農林有害動物・昆虫名鑑増補改訂版（2006）ではナシ